

◇天之国／倭国（高天）／倭奴国（天地）／邪馬台国／大和朝廷の生い立ち

大和朝廷以前の歴史はどうだったのかというと、縄文中期後半、五帝黄帝の一門が北九州に渡って来て、地の神を称える神仙の国・那珂つ国（中つ国、豊葦原中つ国王朝、邪馬台国、倭奴国王朝（天地）、大和朝廷に発展）を立ち上げ、ついで前五世紀前半、呉の太伯や夫差の末裔が江南から渡来して、太陽（日、天）を奉る天之国（倭国王朝（高天）、倭奴国王朝（天地）、邪馬台国（天（厳）王朝・日本王朝、大和朝廷に発展）を興したことに始まった。

前五世紀中頃に、那珂つ国と天之国は、天地の名の下に結集して東海や北陸まで進出した。

前四世紀後半、蛇神を崇める越のオロチ族（越王勾踐の子孫、夏后帝小康庶子の末裔）が江南から大挙来襲して天地を打ちのめし、厳之国王朝（豊葦原中つ国王朝、伊都国王朝、邪馬台国の厳之国王朝に発展）を立ち上げた。

☆越のオロチ族は、福岡平野の宗像家を本家（後に宗家に格上げ）として、佐賀平野の吉野ヶ里、摂津、奈良盆地、出雲、北陸に広がり、それぞれが伊都国、小千氏、三輪氏、佐太国、越のオロチ族（後の越智氏）と称した。

参考までに、越の字は漢音では越、呉音では越と発音して、越は和風の読みだ。

前二二〇年頃、秦に敗れた韓勢（周一族）が朝鮮半島經由で渡来して、天之国ともども厳之国王朝を打倒し、周政治を称える倭国王朝を唐津辺りに開いた。

前二世紀前半、漢朝内部の跡目争いから、漢の王族が倭に流れて来た。時の倭王は筑紫島東部

の国東くにさぎに豊なる国を立てて彼らを迎え入れ、倭の重臣に取り立てた。

前二世紀後半、越オロチ系の葦原家が豊国や中つ国と組んで倭国の都になだれ込み、福岡平野に豊葦原中つ国王朝を打ち立てた。だが、前一世紀中頃に、吉野ヶ里から繰り出してきた越オロチ系伊都国に取って代わられた。

一世紀前半、倭国は豊葦原中つ国と盟約して糸島平野に都していた伊都国王朝を倒し、古巢の吉野ヶ里に押し戻すや、天地なる倭奴国王朝を打ち立て、旧都脇に天宮（天上の都）を開いた。以後、天之国女帝が日天神に昇って天地に君臨し、彼女の婿養子に入った豊葦原中つ国王が倭奴国王（倭王）となつて王朝の一切切取り仕切り、若狭辺りから東海までを治めた。

六代天神から政を託された日隈の伊奘諾期（一八〇年代）に、東の副都（唐古）を治める豊受皇太神（豊葦原中つ国の国主）にのし上がってきた大穴持、月読命、伊奘諾太子、天神の宗女・向津姫の入り婿、高皇産靈）がオロチ三輪氏と組んで謀反し、纏向に水穂の敵之国王朝（邪馬台国）を再現するや、天照大神、天叢雲、水天神と語った。その兒・天鹿兒山も火天神と称した。

倭奴国王朝は播磨や出雲の決戦に大敗して熊襲ヤマトに逃れた。これが倭国大乱だ。敗走した王朝方は日向や薩摩で、天之国、倭、高天、日前、和と称しながら、倭奴国王朝再興を画策してきた。二二〇年代前半、天照大神が急逝した。日向の高天原で日神に担がれた天照大御神（向津姫）は、纏向に遷座して女王ヒミコに立つと、天（敵）之国王朝と銘打って倭奴国王朝再興を図った。

ヒミコの晩年、火明饒速日（火瓊瓊杵の兒、火照、海幸彦）が日向から大倭に天降ってきて、日本王朝に衣替えした。彼はヒミコの墓を泰山に見立てて封禪すると、日と火の天神に昇り、天照国照彦火明命と語った。その後は、倭奴国王朝再現に取り組む一方で、何度も熊襲征伐（景行・仲哀の熊襲征伐、日本武尊の熊襲征伐）を試みたが、いずれの場合も失敗に終わった。

三世紀末、和の磐余彦（神武）が日向から東征して日本王朝を打ち破り、大和朝廷を樹立した。ここに、日神の切望していた倭奴国王朝再興がようやく叶った。

三〇四年二月、神武は鳥見山の祭場（桜井茶臼山古墳）で高皇産靈に代わって封禅しながらに郊祭して、皇天二神（日神・高皇産靈）を皇祖皇宗に奉り、その教えに永久に従うことを誓った。これでわかるように、江南から日本列島に渡ってきた呉越の子孫は先祖の怨念を引きずりながら、数百年に渡って覇権を争ってきた。三世紀に始まる前方後円墳の形は、「天は円形、地は方形」とする古代思想の下で、この怨念に終止符を打ちたい決意を具現したものだ。

言い換えると、前方後円墳は、それぞれの家が積年の怨念をきつぱりと捨て去り、新しい国づくりにより一致団結して邁進したいと亡き先祖に誓ったり、祈願するなどした祭場でもあった。

参考までに、それぞれの国の生い立ちに関係する記録や伝聞なども知っておこう。

① 那珂つ国にまつわるもの

★黄帝は自らの国を中つ国として、東西南北四方に四人の天帝を配して国邑の安泰を図ってきた。南の天帝は苗族も治める炎帝一門であり、その領域は長江の中・下流域に及んでいた。

西の天帝は白帝と称して関中（渭水平原）を統治した。北の天帝となった后土は幽都（北の都）に留まって北方を統治する一方、死者の魂が寄り集まる鬼国（黄泉国）も鎮撫した。この一門は死者が黄泉国に赴く際の葬送儀礼に加えて、天文地理や神仙術も司ったという。

古来、中央の元は大地でその色は黄、東西南北の元はそれぞれ木・金・火・水で、色は青・白・赤（朱）・黒に当てられたことで、この時代は五帝時代、自身も黄帝と称した。

☆後漢時代、北京から遼東にかけての地域は幽州と呼ばれたから、幽都は渤海の西か北に、

黄泉国もその近辺、または渤海の孤島にあったのではないか。言い伝えによると、黄泉国に有るものは全て、黒水・黒い鳥・黒い蛇・黒い狐・黒い民といった風に黒一色から成つていたという。

★黄帝の妻の一人だった皇娥は、天上の仙女として天宮に住み、日夜、機織りに精を出していた。ある日、彼女が疲れを癒そうと水辺に降り立つと、白帝の子と称する若者と出会って心を通わせあつた。二人の間に児ができた。成人したその児は、東方に鳥の王国を立てて東の天帝に昇つた。その児が渤海の東海上に乗り出して帰墟なる最果ての島々に渡り、海神らを従えて神仙の国（神国）を立てた。

☆仙話によると、東の海上には、かつて五つの神山が漂いながら浮んでいたが、その二つは北海に流されたり、水没するなどして蓬萊・方丈・瀛州の三神山だけが残つたという。

【玄界灘沿岸の地名】、博多近くには那珂・那珂郡・那珂川の地名があり、その北に暗黒の幽冥界を連想させる玄界灘・玄界島・玄海の地名が残る。これこそ、那珂つ国や、その一門の后土の国、黄泉国があつた名残であろう。

②天之国（太伯ら子孫）／倭国（高天）／倭奴国（天地）にまつわるもの

★『晋書』や『魏略』逸文、「倭人は）太伯の末裔と自ら言う」

宋・元時代を生き抜いた中国史家も、三世紀の倭人が語った言葉としてこう書き残す。

「日本いう、呉の太伯の後なりと。けだし、呉亡んでその傍流、海に入って倭となる」

『史記』、「末弟の季歴（文王）が優れた素質を持ちあわせ、その児・昌（武王）の出生時に瑞兆が現れたことで、周太王は、『我が子孫で栄える者があるとすれば、昌であろう』と言つた。

これを耳にした嫡子の太伯は、太王が末弟に相続させたがっていると悟ると、次弟と一緒に荊蛮の地に逃れた。そして、その土俗に従って入れ墨と断髪を施し、二度と周王朝に戻らない覚悟まで示した。これに感激した南蛮の千余家が太伯を君主に担いで呉の国を立てた」

★倭国、倭奴国、日本国については、『隋書』、『旧唐書』、『宋史』、『元史』にこうある。

『隋書』「倭国伝」、「漢の光武の時、使を遣わして入朝し、自ら大夫と称す。安帝の時、また使を遣わして朝貢す、これ倭奴国という」

『旧唐書』「倭国日本伝」、「倭国は古の倭奴国なり。・・その王、姓は阿每氏なり」、

「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」

『宋史』「日本伝」、「日本国はもとの倭奴国なり」

『元史』「日本伝」、「日本国は東海の東にあり、古は倭奴国と称した」

★『日本書紀』にある天地開闢の神話、「天先ず成りて地後に定る。然して後に、神聖、その中に生まれます。故曰わく、開闢くる初に洲壤の浮かれ漂えること、たとえば游魚の水上に浮けるがごとし。時に、天地の中に一物生れり。・・便ち神となる。国常立尊と号す」

天地の国のかたちは、『淮南子』などの天地開闢の神話に由来している。

「昔、天も地もなかったとき、世界は真つ暗闇で、形あるものは何一つなく混沌としていた。その中から、二神が生まれ出た。陰陽の二神で、天地の創造に苦勞していた。やがて、陰陽が分かれて八方の位置も定まると、陽神が天、陰神が地を治めることになってこの国ができた」

☆五七年、初代倭奴国王が光武帝のもとに朝貢し、金印と共に拝領したらしき方格規矩鏡には、円形の鏡に方形が大きく描かれている。それは、天地の国のかたちと同一だ。

③ 敵之国（越オロチ族）／葦原家／伊都国にまつわるもの

『史記』「越王勾踐世家」、「越王勾踐の先祖は禹王の末裔であつて、夏后帝小康の庶子である。会稽に封じられてからは、禹王の祭祀を勤めとさせられた。その後、南方の蛮族の風習に従つて体に入れ墨し、髪を結わずに振り乱しながら、藪を切り開いて町をおこした」

『漢書』「地理志」、「楽浪海中に住む東夷（倭人）は、孔子が道德の廃れたことを嘆くあまり、東の海上に出てそこに住みたいと願つたほどに、その天性は今も柔順にして、三方とは異なる。その東夷が百余国の上に立つて年毎の貢ぎ物を持ち来たり、漢帝に献見したという」

「倭人伝」、「夏后小康の子は会稽に封ぜられると、髪を切り、体に入れ墨して蛟竜の害を避けた。倭人の海士も海に潜つて魚貝を捕え、体に入れ墨して大魚・水鳥を払いのける。・倭への道程を計ると、会稽かいけい東冶とうや（福建省、台湾の対岸）の東にあたる。風俗・習慣・産物・武器類は海南島に同じ」

④ 呉越の戦い ☆越都のあつた紹興近くには、今も禹を蛇神として祀る廟が残るといふ。

前四九四年、呉王夫差が越王勾踐率いる大軍を破つた。勾踐は兵五千と共に会稽山に立てこもつたが、逃げる隙間もないほど包囲された。進退窮まつた勾踐が平身低頭して和睦を願ひ出ると、夫差は臣下の反対を押し切つて和睦を許し、兵をさつさと引き上げた。

☆夫差は、荊蛮の千余家に担がれた太伯が自国を句呉と称して以来、二〇余代目にあたる。前四八九年、夫差は、斉では景公没後に大臣らが権勢を争つていと聞くと、北に出兵して

艾陵がりよう（山東）で斉を叩いた。その後も斉に留まつて、斉や魯の南方を攻略した。前四八二年春にも北に軍を送り、黄地（河南）で諸侯らと会盟した。中国の覇者となつて、周

室を安泰せしめたいと望んだからだ。このとき、呉軍の精銳はあらかたが夫差に随行して、残る老人・婦女子が太子と共に留守を預かっていた。

勾踐はその隙を突いて、呉の都に不意討ちをかけ、太子を殺害した。前四七八年、越はまたも呉に大勝してその都を包囲すること三年だった。

孔子の死から六年後の前四七三年、越軍はついに呉の都を落とした。勾踐は呉の国内を隅々まで平定すると、大軍と共に淮水を渡って齊・晋の諸侯らと徐州で会合し、ついで貢ぎ物を周室に献上した。周の元王は使者を遣わして勾踐にひつり胙を賜い、覇者の称号・侯伯を与えた。

その後も勾踐は楚に淮水地方を与えたり、宋には呉が侵略した宋の旧領を返してやったり、魯に対しても泗水の東、方百里の土地を分与するなどした。この時期、越軍は長江や淮水の東を自由に行き来できたことで、諸侯らは越王勾踐を慶賀して霸王と称えた。

六代後の越王無疆も北に進軍して齊を攻め、ついで西の楚を伐つて中原の諸侯らと覇権を争った。前三三四年、彼は再び北上して齊を伐とうとしたが、翻意して楚の討伐に向かった。楚の威王はこれを迎え撃つて越の所領をことごとく奪った。

解体の憂き目にあつた越一門は、互いに小国を立てて相争い、ある者は王、ある者は君と称して長江南の海岸地域に割拠したが、いつしか楚に入朝して臣下に成り下がっていた。

越の所領からはじき出された一門や沿岸住民も、広東・安南の海沿いに散って行く他なかった。

